## 私の読んだ本 (4)

飯塚浩二著

# 「東洋史と西洋史のあいだ」(岩波書店, 1971)

木下清一郎 (動物)

この本はまず面白さにひきずられて読みとおした。昔，歴史で習ったことがらが次々と意外な面から光があてられて，これまでの栄光が色あせてしまったり，逆に歴史を動かす原動力の所在を浮きぼりにして見せられたりしたからである。

チンギス汗一党にひきいられたモンゴルがあの歴史上未曾有の版図をもった大帝国をどうしてつくり上げたのか，いつも不思議に思っていたのだが，その疑問がこの本の一章を読んで氷解するおもいがした。著者によると砂漠というものは海洋になぞらえて考えるのが理解の早道だという。つまり，陸上の国土は一画一画占領してゆかねばならぬが，海洋は船舶や艦隊の所有者にとっては一気に対岸まで押し渡ってしまうことのできる空白部分である。遊牧民にとって，また隊商商人にとって，砂漠とはこの点でまことに海洋に似ている。遊牧民の襲撃に遭遇したオアシスの運命は，艦隊に包囲された孤島のそれに似ているという譬えは非常に面白かった。チンギス汗麾下のモンゴル軍が大領域を短時日の間に征服したのは大陸上の事件ではあるが，彼らが建設した大帝国の空間的な広さは，ローマ帝国や中国のそれに比較すべきではなくて，むしろ，大英帝国のような海洋国家のそれに比較さるべきものと記されている。

また，「血に渇した破壊を希求するチンギス汗が未開の蛮族をひきいて，残忍な武力と恐怖政策によって掠奪蹂躙した」といった見方は当を得ていないことを説得力のある筆でのべている。戦争の捕虜の助命については，遊牧民と農耕民とではまったく観点がことなる。遊牧民は奴隷を抱えておくほどの労役もなく，食糧の余裕もないので捕虜を殺してしまうが，農耕民は捕虜を農耕作業などの労役に生産的に使役できるので，捕虜を生かしておく可能性がある。この相違は，一方が残忍であり，一方が仁慈であるというような，倫理的な規準で区別さるべき相違ではあるまいというのが著者の一つの指摘である。

これに加えて，単なるテロルの力であの大帝国を長年月にわたって維持することは到底不可能で，チンギス汗は何等かの理由からその時代に求められていたに違いないというのがもう一つの指摘である。当時，アジアでは隊商の形をとった商業資本が大きな役割を演じており，すでにモンゴル，中国，イスラームには彼等の大商会が存在していた。彼等のもっとも強く望むものは治安の維持であったに違いなく，それには遊牧民の割拠よりも強力な統一勢力の出現が期待されたであろうことは想像にかたくない。チンギス汗はこの流れにのり得た時代の子である。

このように書いているときりがない。このほかにもアラビア人の湖水であった地中海の話や，ヴェネチアがヨーロッパとビザンチンやイスラームを結ぶ窓口で，ここを通って東洋の香料がヨーロッパへ入るが，ここから東洋へでてくる商品はどうも白人の奴隷であったらしい話や，目の玉のまわるような話がのっている。これを読んでいると，著書の中にも書かれているが，「時は最上の審判官」であるというのがまことにあやしくなってしまった。世の定説というものはまったく片手落ちで悪意に満ちている。そのような不公平はどこからくるかというと，著者によれば「世界」は地上に数多く存在していたし今もいることを意識しないところからくるという。つまり，印度航路の「発見」だの，新大陸の「発見」だのといういい方が平気でつかわれているのは，ある「世界」にとっては未知であるかも知れないが，対等に存在している別の「世界」があることをないがしろにした考え方が底にあるからで，これがいまだにどんなに根強くはび

こっているか，数多の実例でよくわかった。

この本は続く「東洋への視角と西洋への視角」，「ヨーロッパ対非ヨーロッパ」とともに三部作ともいうべきものであるが，これらをつづけて読んでゆくと面白いだけの読み方が次第にできなくなってゆく。それは著者が病いと闘いながら遂に刀折れ矢尽きて倒れるまで言い遺したいことを血を吐く思いで書きつづってゆく有様が文章にもあらわれてきてほとんど寒さを感じさせるほどのものであるからである。

因みに，著者の飯塚浩二氏は，動物学者飯塚啓氏の息であられ，そのためもあってか，文中にたとえば，日本刀のつかについているいわゆる「さめ皮」はジャワ地方に産するエイ類，***Trygon sephen*** CUVIER，の背皮であるとか，人文地理学や経済学でも動物・植物の生態学の成果をもっととり入れることが望ましいといった話もでてきて興味深かった。